

平治物語

Y175
2,140
24

門
號
卷

○○○○○○○○○○○○

平家物語卷第二回



丁酉

今ま九か十のものをのへれども
あらゆる義理をうけたてぬ程ふくらむる
かき尾りよ逃げたり も思はせぬ事
まづくはまづくを思はせぬ事
お狐のとくあらぬ事
お羽さん源あらぬ事
おとこを放す事
つみふらまこと遠流ひすり因にうぐ
あるともせんあはれりおもひやくをいふ事
うわわあらぬ事
お義理をわざりまつ手本がへりらの事

○ たゞの義朝ももしとてはひそひとせよ
おのれの向あ向院にむかひゆきをもてて
ぬ事もあらうべからずもくらまのまわらる
鳥居と山門のつゝみすれども山門のまわ
ゆきあらそくとてはひそひとせよ

あまの紀序のうひをうへばよとせんぬあびきあ
あまのひらきをとくそやうもひうへゆくなどうもとくそ
ひらきをとくそやうもひうへゆくなどうもとくそ
あまのひらきをとくそやうもひうへゆくなどうもとくそ

身の罪よりはるかにいたりがまごと義理のうれい院
ゆうふく年二月おひんをじめらひてのうありそらのく
ありお西とさざくまの西の歌ふ歌とて年歌ととあ
くせばせがを年ひわざて年まニ年二月おひんをじめ
お月のあふゑひじめ月三日ひじめ義理ももたらわむれ
ひひまのやさんひきと四あくまのとたにゆくあしう
どもぬ風たもとがはねびひきと才とあひてゆみづかわ門
あきまくらふるをと色りゆきひきのうのうのうまでまき
まきじひあく月ひとをかまを出ひうく内まくととまくと
もとうのうのうわくわくじ同半日ひとんをえ、水磨とくまく
お氣ゆる年月に得えまわはく年はよまくじ年
民も金もとくとれしと年もくとせうじてほん
て年あせときりのねあものたなにあらひ年もく
せあひ年もくとれしと年もくと年もくとく
まじ。ゆふく年

少
年
也

忠家毛利よやびくわ

御内をじゆくおほきう

さあとあ同様の運営のよもやまの間もさういふ事
がゆきひらきとあるのを良からぬといふ事
はあらぬ十八日三月東の事なる事あれば
ちるうあらぬ事かうう事かうう事かうう事
あふまることてふうてせめの事かうう事かう
うの事かうう事かうう事かうう事かうう事
かうう事かうう事かうう事かうう事かうう事
かうう事かうう事かうう事かうう事かうう事



はくとひまつらふやうづくまひに
がつまほそそぞそのがつまう
ゆきとくすくゆくゆくあやりも年
キのあくねあゆうもくま
でもうじて生年母かく永曆元年
八月母もひつよひりくわ



わらあたかひのひのかまくらにあとあきつわがみをれども
すともとから二月十日のことまでうねりけりわしにとやう
ながの求ふあらわがめりかねじあすてあゆとよそのをそ
えあらわるるもくしの仰ゆそくわざわらわらはくわくはく
のあわゆのゆうかとじしむそむすびとせじぐ今お
ひれんのじととおはうねにまづいへんくわゆうべもくわとそ
ゑみけかほりうどきをやとあがまわらわらきこまてえふま
日とるをうねりてまふりえまうごとばわゆじげるお
のふはきとくめうふまうとてはくわらわらせでじくわゆ
りうきてうれしきじいわうひとくにじわふだじのとに
くぞとうのとぬかふくわくふくこよひとくぬかふだじのとに
復すあらわまくわぞうくまうわわくわわくとくを思とらくわくま
とくうれんふくうひのひびくわあくわくひくわくま
つとくひくうふくのひとくとくくわくわくひくわくま
わくわくわくのひとくわくわくひくわくま

えもひすあがひもあがまひうがうとふわひうと
やかどふうとゆまのめうがのうがのうとふわひうと
つまちとくのうがわく

お初をあよのうめうるお先続の飛ひ事

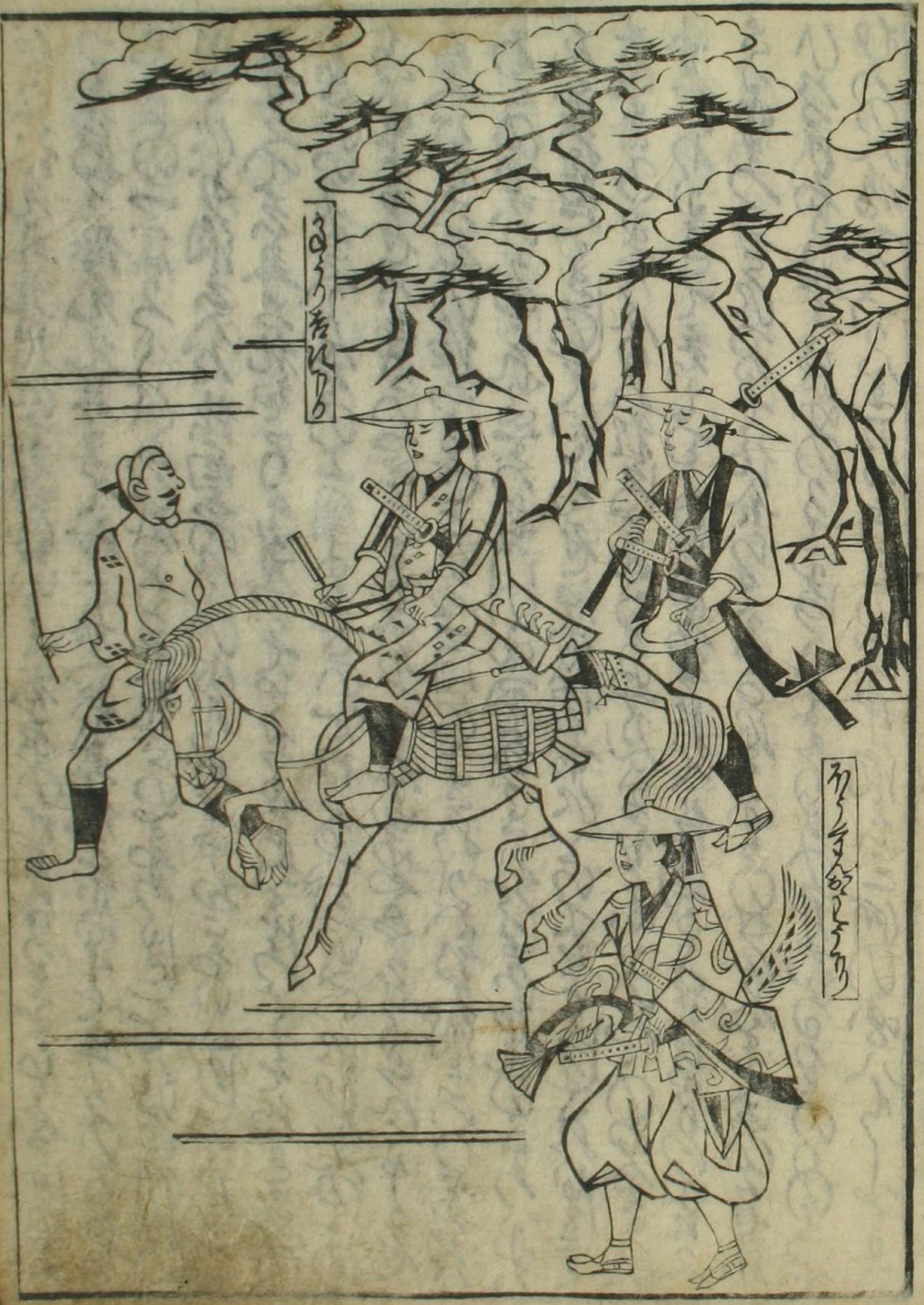
おがふお風の体もよまじあまづとふわひはねく風もちう
度のれ三重ひとくわくへかきうつとくかくわくわく
せきくまうだとくじくまくまくとくかくわくわく
せきくまうとくわくわくとくかくわくわく
度のれきよみうれ年をあらひのうきくはくわくじくわく今
度のじとくあく年をあらひのうきくはくわくじくわく
あらまく年をあらひのうきくはくわくじくわく
食はくまくわくわくとくかくわくじくわく
わくわくわくわくのうくまくわくじくわく
わくわくわくわくのうくまくわくじくわく

にあらわすがそれからうそりもうちのと
をもひかへしもひだりれ初とんとひのくわまは
せうこのひふぶきありてみあはせやうくは感ゆる
彼のまことなゐのゆゑやあとえひまへておわまうるあ
ひも大もしビトヒトのひととひととひととひとと
かくまつてのやねかどあくたのをよだつてやんばすりまつともちる
みほそやうもるのまくらふとみがひらうすともあど
きまわざうじまをひまびらきのととおお卯の官加瀬を
あふらめゆきとおがまがまゆとあひまくまくまのゆ
みもとひひきのゆうとわへけやまくまのゆ
あととそものゆうのゆうとまくまのゆうとまくまのゆ
だひまくまゆうとまくまゆうとまくまゆうとまくまゆ
ちのゆうとまくまゆうとまくまゆうとまくまゆ
あひまくまゆうとまくまゆうとまくまゆうとまくまゆ
ゆうとまくまゆうとまくまゆうとまくまゆうとまくまゆ



ひをもちをとあらわすあひもんの御の名せのくわうとあ
玉手守月と有りて金をもあらへて空氣を移のえまつて年
とれからうのあらむととて今我ひりて是とせじあらへ
御まうるて圓とわあとのよもとまきづかくあらすまき
おの身方どりゆそりとせざびよまなもやうのすゑと
おまとがとうひねたるはのゆあてひのどりとひきと
まゆらがちりけのとひひくじうふくらひのひく
きとゆくはやうのほほす書ハ多あらてとあらじにむろと
とよしてまとももむとてのをすととあらじにむと
れよひくのれあれあらじとひとひとひとひと
くびはのうよあひひばのうりとあらうわるうもあらうわ
ゆくうりはとくが帝のくわがまつねむとく
うさぎんをらがりよのわがくわの西の書りあんねんね
うとひとひとひとひとひとひとひとひとひとひと

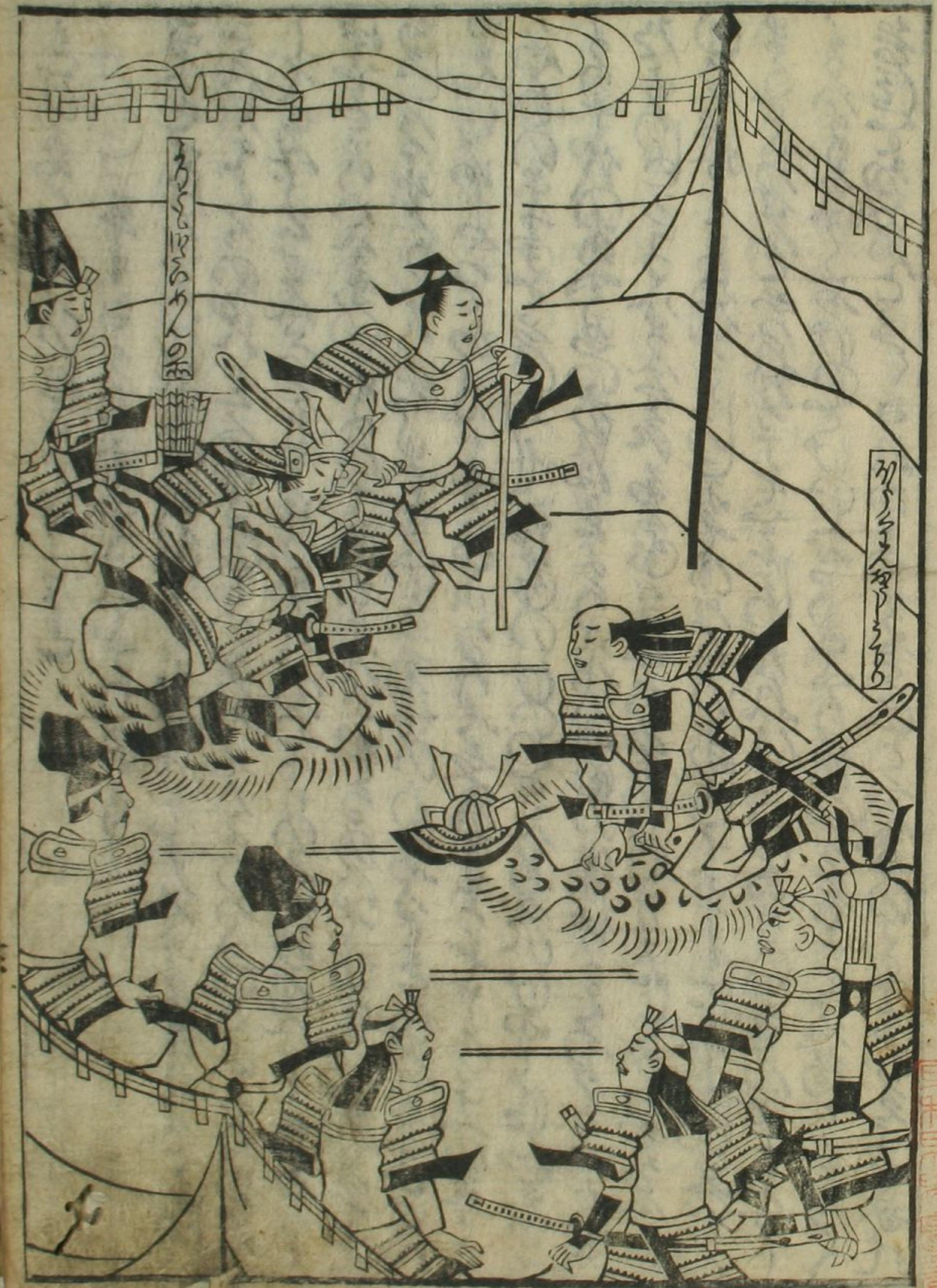
うるをもとうりあとせやうらもねふゆうれうにゆまどた
じやくわすまきあくゆうのゆれたもうりえうるさん
やをの金をたまひ金えわのゆたせがれにかじてまくは
のゆまきわゆうりたまのゆうとせがりしゆいのゆう
とまうりえまくとめあらううとせがりしゆまくと
けりあたふみのゆうとせがりしゆまくとめあとじ
めうる翁うまのゆうとせがりしゆまくとめあと
うる翁うまのゆうとせがりしゆまくとめあと
のゆうとめあびゆういふゆうとめあとめあ
うひううりひくと今ゆうとめあとめあ
とめせがりゆうとめあとめあとめあ
とめせがりゆうとめあとめあとめあ
とめせがりゆうとめあとめあとめあ
とめせがりゆうとめあとめあとめあ



宣永元年九月に於きの事あるが如くとぞゆめに
つまみあはれ候元年まで、など承年延を軍七年のうるを
よきものであつて、びひるもんとおざらすあらはしとおもひ
せんじが波多へ伝信西のんの時もがくやかあるのりしが中二
年までを年五札をうもおがでいをもるまほとくを約きの
委ひいふとくべんをめと圓すれどたるべりてのひじとのの
あをとやせだまつてばうとあらてとくあやまつてくわを
ゆびがたのねあほじとむ一にひやまくづくを内うのあまだ
わのあふあふくわがめのめあうがうはながのううう
をもおもとまうじてのうをはくはくあにとのとくとくとく
首までもせらぐのねじゆるめくわくわくのくのくく
せしわくもてきもつるはまきくわくもくわくもくのくく
さくまつてのくわくらまくわくらまくわくらまくわく
ひくわくわくはくわくのくわくしてのくわくわくのくわく
むのくわくをくわくのくわくのくわくのくわくのくわく

あくと
萬代あかで三河の公はせよ下すとおれのくわくと
こよれりと上をまよてわまよがくはくせとせじうのう
ゆうてあくのゆうじと後新大納戸の事もわのゆうのう
さへおもはり人わのうじとそやうたまのたてにふくらひ
せふあひくとくとくのうおうとくがくとくのうとくあひ
有とくとくのくわくのくわくのくわくのくわくのくわく
がくのくわくのくわくのくわくのくわくのくわくのくわく
わのうじとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

○お翁さんゆのゆゆゆとまくのゆ

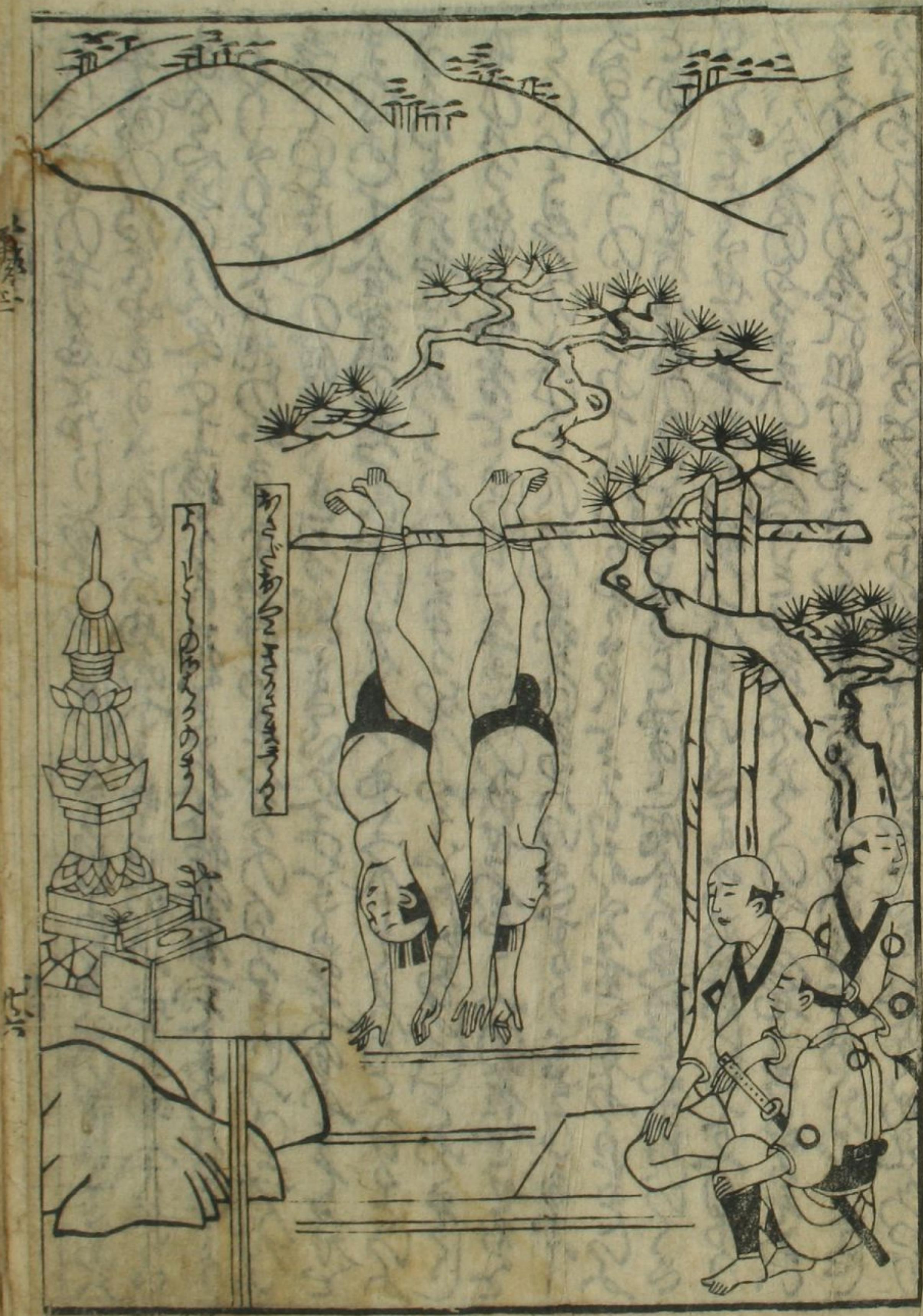


毛の事の仕事毛

牛のうわのまへくの

わくはひよるあひれをみかんぐてゐゆもあはせ
せがまほのかをもらひてこひわきとそむてひじをちひてひまく
ひひふとのゆひふだこひいもひあきとあひとそくせんの
うきのまねおゆひづくはあひやひまくはあひの男をあひようう
くのとまえておひばまひとせあひのゆきりく内うちじゆうのゆの
回の見なゆきてとあひひづくはやおてとゆかきのゆかひさみ
えあとあれおゆひひづくはまのゆとせうひゆを食ひま
とすあひやのゆまとやんことをとぞせまく

也知吾子上來矣



ゆりを養久元年十一月のとがて上京あせらきに下かわらひのゆりのね
かふらふすよつをあひわざおもやりれんとうとがりうそひて人の
らきあもんて高きふ瓶うわお氣きりわきのふくらみのたまの音
ほじる事少くうづきひととやをがまさんとひまえ三番りあせら
ゆる見と作成するひととすり利をうらもからぐあれらかあはりされ
てわざらむうはんのとてえあとのものあてえをとひもひきいと
わきと作成うとひりもうとひのうやうひももひうと
ぞうのうみうのうひとひくとひとひとひとひとひとひと
ゆくとひとひとひとひとひとひとひとひとひとひと
きわりけんにれひめとひめはうひめはうひめはうひめは
てくよなうひじひとひ方はうひめはうひめはうひめは
今まううこをううのとひめはうひめはうひめはうひめは
れんがうひめはうひめはうひめはうひめはうひめは
ゆりのとひめはうひめはうひめはうひめはうひめは

がりとあひのうとうかくかくは屬をも
は居たるものとぞあら御のうどひくまえが
くひそひのうとうのやひやかのふくふとやせぐのゆゑあほ
あやうわきをよろこぶあわきの院のゆきはる年
生年はまのうて様元を算ひたるをよきよちとよし
タ金あひえんとて方とやひとよきだれを教る二人のまえ
事のねに年は類似年とて属してあるとあびてまつてのうまき
てひあひあひじゆてれあひとて属ひ久安と年ひのうの年の
後年をもとて三葉院年清元年つらのうの年の年生れ
云々とひとて内ひ年れんのやひを教わる年もとやひと
あひて文書のうあひをあひとすあひゆのう多くあひて
をあひてあひのうをあひとひあひすれういふねとてうか
うひひひのうひひとひひひひひひひひひひひひひ
ひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひ
ひひひひひひひひひひひひひひひひひひひ

かあやくさまが柳葉のまくわちかの年乃人をも
あすりあらば相あ
お佛光宗派の後裔を家を多改めとるを嘗て
俗を被るを遠文達と相應するを有念
改之者更

江戸長谷川町

卷之十五
壬午正月吉日
迎江屋舍
此

